

魅

惑的な遊戯への欲求を心に秘め、ファッションという名の装置を駆使して快楽に溺れる。「見せる」「隠す」を同時に表現するファッションは、衣服と性が共謀し、悪戯つばく異性を魅惑する。普段のファッションも、その変遷や性との関わりなどから見つめ直してみるのも楽しいものである。

『ファッションの技法』は、女のおしゃれの本質に迫ったファッション論である。第一章は、女はなぜおしゃれをするのか、ファッションの目的は何か、との問いかけから始まり、ここで著者は「男を誘惑するため」と、いたってシンプルでストレートな一論を挙げていく。男と女の性差による誘惑論を考察し、ファッションとは女の身体が備えている性的価値を際立たせることから、ファッションと性の関係をつきつめていく。服飾史や女性論を交えた分析も面白い。何世紀も続いた「飾ること」「秘めること」を技法にしたスタイルは、20世紀になると、それまでの美意識を覆してモード大革命を巻き起こしたココ・シャネルによって終焉を迎えた。そして、現在私たちのファッション感覚の根本は、シャネルの革命をひきついでいる。流行論など身近な話題で盛り上げながら、ファッションと女をわかりやすく説明していく。

『性&スーツ』現代衣服が形づくられるまで』は、美術史家であり、ニューヨーク人文科学研究所の特別研究員である著者が、男性のスーツの持続性に着目したファッション学である。そのフォルムは多

様な演出を可能にし、根底には性的なエネルギーを秘め、今もなお存続している。男女の衣服の関係性を捉え、双方の服飾史を織り込みながら、200年近くも変わらないスーツ着用の歴史の秘密をひもといていく。あくまでも、スーツは「芸術作品」であるというのが彼女独自の視点である。男女のセクシュアリティ、スーツをコピーしたがる女性のファッション、スーツが迎える未来など、スーツの話だけでなく興味深いさまざまなアプローチが展開し、新鮮な感覚を覚えながらどんどん引き込まれてしまう。

『ディオールの世界』は、クリスチャン・ディオールの知られざる生涯を描いたものである。42歳でメゾンを設立し、世界中にその名をとどろかせたディオールの背景には、ベル・エポックと呼ばれる優雅で満ち足りた時代、尊敬していたジャン・コクトーら芸術家や小説家、詩人たちの時代、二度も戦争を体験した悲惨な時代、数多くの激動の中を生きてきた人生があった。そしてデビューからわずか10年後、突如その生涯は終わりを告げたのである。パリ在住のジャーナリストである著者が、南仏に暮らす妹やイヴ・サンローラン、親友ビエール・ペルジェなどの回想を交えながら、クリスチャン・ディオールという一人の男の姿を綴っている。

ファッションに対して新たな価値観や観察眼を与えてくれるこれらの本は、私たちをますますファッションの虜にするだろう。それは持つて生まれた性のように自然なことなのだから。

BOOKS

PICK-UP

Text: SHOKO SATO



アン・ホランダー著／中野香織訳
『性&スーツ』白水社 2800円

あまりにも奥ゆかしい モードの変容



川島ルミ子著『ディオールの世界』
集英社 2100円



山田登世子著
『ファッションの技法』
講談社現代新書 640円+税



世界のトップデザイナー をコレクション

常に変化の激しいモード界にあって時代を超えた斬新なアイデアと卓越した独創性で独自のスタイルを表現し続けるトップデザイナーたちの個性あふれるスタイルを、各々別に豊富なヴィジュアルで紹介するシリーズが続々と刊行されています。ディオール、シャネル、アラリア、ヴィオネ(第1弾)、ヴァレンティノ、ゴルティエ、ラクロワ(第2弾)、イヴ・サンローラン、チャールズ・ジェームス、ヴェルサーチ、スキャパレリ(第3弾)、ランバン、ボワレ、バレンシアガ、ソニア・リキエル、ヨウジ・ヤマモト(第4弾)に続き、11月下旬にはヴィヴィアン・ウエストウッド、イッセイ・ミヤケが刊行された。これらのシリーズは世界5カ国(日、仏、英、米、独)同時刊行。A5変型(215×155mm)／図版約50点／オールカラー 2000円+税